



名大トピックス

No.134 平成16年7月30日発行 名古屋大学総務企画部総務広報課 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Tel 052)789-2016
ホームページ URL <http://www.nagoya-u.ac.jp>

第45回名大祭「活 - iki - 」が開催される



CONTENTS

・第45回名大祭「活 - iki - 」が開催される.....	2	《総長の学内視察》2 鶴舞キャンパス.....	13
・第3回産学官連携推進会議が開催される.....	4	・総長等表敬訪問一覧(平成16年4月~6月).....	14
・ノーベル医学・生理学賞受賞者のイグナロ ルイス ジェイ氏 に名誉博士号を授与.....	5	・博物館が第32回・第33回特別講演会を開催.....	15
 生命を持たない生命体 武田 邦彦.....	6	・博物館が第11回コンサートを開催.....	16
・(財)武田科学振興財団研究奨励金の贈呈式が行われる.....	8	・名古屋大学博物館友の会が発足.....	16
・太陽地球環境研究所等が主催する「CAWSES キックオフ 会議」が開催される.....	9	・農学国際教育協力研究センターが2004年度第2回オープン セミナーを開催.....	17
・医学部画像情報外科学(ジョンソン・エンド・ジョンソン) 寄附講座の創設記念式典等を開催.....	10	・構内環境美化運動「キャンパスクリーンウィーク」を実施...	17
・教育学部附属中・高等学校が第2回生徒会フォーラムを開催...	11	・本学で東海地区国立大学法人等新入職員研修を開催.....	18
新コーナー		[INFORMATION]	
《総長の学内視察》1 附属農場と太陽地球環境研究所.....	12	・イベント等の開催予定一覧.....	19
		・本学関係の新聞記事掲載一覧(平成16年6月分).....	21



第45回名大祭「活 - iki - 」が開催される

第45回名大祭が、6月3日（木）から6日（日）までの4日間、「活 - iki - 」をテーマに開催されました。今年のテーマである「活 - iki - 」は、「活」という字が、活力、活路、活況などの言葉、ikiという音が、「生」、「粋」、「意気」などの言葉を連想させ、エネル

ギーあふれる名大祭にふさわしいということから選ばれました。

毎年恒例のプレ企画「仮装行列2004～小粋な名大Walker～」は、雨天のため中止となってしまいましたが、5月28日（金）から5月29日（土）にかけて行われた「LINK on RINK 徹夜でスケート2004～今夜は - iki - に大騒ぎ～」には例年を上回る数の大学生が訪れ、名大祭本番へ向けての雰囲気を盛り上げました。

期間中は、演劇・合唱・伝統芸能・絵画など学内の部活・サークルの発表が多数行われたほか、豊田講堂前や第2グリーンベルトのステージでは、「TRICOLOR」、「後夜祭 - ikiyo - 」などのステージ企画やバンドのライブが人気を集めていました。また、グリーンベルト両側の「模擬店ストリート」には、120店舗以上の模擬店が並び、大変な賑わいをみせていました。他にも、ゴミ問題への知識を深めることを目的とした「第5回



Street Champion



名大寄席



アカペラライブ「わっしょい！」



オルゴール・からくり・ロボット展



28th THE GREEN FESTIVAL

エコツアー」、学内の5つの合唱団による「名古屋大学合同合唱祭」、基礎体力測定等の検査を受けることができる「模擬病棟2004」、見るだけでなく、触れて楽しむことができる「オルゴール・からくり・ロボット展」、毎年恒例の「The 38th Fire Storm」等の多様な企画が行われました。

さらに、元中日投手の今中慎二氏など、学内外の講師による講演会や、研究公開など学術的な企画も多数開催されました。特に、研究公開では、全学部から63の研究室・施設が公開され、高校生をはじめ、多くの参加者が、普段見ることのできない研究の実演を興味

深げに見学していました。

今年は、最終日に若干の雨に見舞われた以外は天気にも恵まれ、本学学生や一般市民など、昨年を上回る5万人の来場者が、100以上の企画が行われた東海地区最大規模の大学祭を楽しみました。



模擬店ストリート



後夜祭 - ikiyo -



第3回産学官連携推進会議が開催される - 上田教授が日本学術会議会長賞を受賞 -

第3回産学官連携推進会議（内閣府、総務省、文部科学省、経済産業省、日本経済団体連合会、日本学術会議主催）が、6月19日（土）、20日（日）の2日間、国立京都国際会館において開催されました。

この会議は、これまでの産学官連携サミット、地域産学官連携サミット及び産学官連携推進会議の成果を踏まえ、産学官連携の推進を担う第一線のリーダーや実務経験者等を対象に、具体的な課題について、研究協議、情報交換、対話・交流・展示等の機会を設けることにより、産学官連携の実質かつ着実な進展を図り、科学技術創造立国の実現に資することを目的として開催されたもので、2日間で延べ約6,000名が参加しました。本学からは、平野総長をはじめ、山本理事、澤木工学研究科長、松井エコトピア科学研究機構長のほか、45名が参加し、また、本学の研究成果等の紹介ブースを7テーマ出展しました。

1日目は、主催者あいさつ、基調講演及び特別講演に続いて、「企業・大学の戦略的産学連携」、「知的財産の戦略的創造・活用」、「地域クラスターと中小企業」、「科学技術関係人材の育成・活用」をテーマとした4つの分科会が開催され、企業、大学等の立場からの基調提案を受け、本学参加者を含め活発な議論が行われました。

2日目は、産学官連携功労者の表彰等が行われました。これは、産学官連携活動において大きな成果を収

め、また、先導的な取り組みを行うなど、産学官連携活動に多大な貢献をしたと認められるグループ、大学、企業等に対して表彰を行うもので、本学からは、昨年度の赤崎 勇名誉教授に続いて、上田 実医学系研究科教授の「ヒト細胞・組織による培養表皮・培養軟骨の開発」が「日本学術会議会長賞」を受賞しました。

また、本学の出展ブースには、本学の経営協議会委員の齋藤明彦トヨタ自動車(株)取締役副社長、包括的連携を結んでいる三菱重工業(株)等の企業関係者ら、多くの方が訪れました。

《名古屋大学の出展ブース》

- ・産学官連携推進本部、知的財産部
- ・21世紀 COE プログラム「先端プラズマ科学が拓くナノ情報デバイス」 代表者 菅井秀郎工学研究科教授
- ・21世紀 COE プログラム「自然に学ぶ材料プロセスの創成」 代表者 浅井滋生工学研究科教授
- ・単結晶のエッチング研究と MEMS 産業への展開 代表者 佐藤一雄工学研究科教授
- ・ユビキタス社会を支える基盤ソフトウェア 代表者 河口信夫情報連携基盤センター助教授
- ・エコトピア科学研究機構
- ・エコトピア科学研究機構ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー関連教員による産学官連携の事例紹介



本学の出展ブースを訪れる齋藤トヨタ自動車(株)取締役副社長



日本学術会議会長賞を受賞した上田医学系研究科教授（右から2人目）



ノーベル医学・生理学賞受賞者の イグナロ ルイス ジェイ氏に名誉博士号を授与

イグナロ ルイス ジェイ博士（カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部教授）に対する本学名誉博士号（第12号）の授与式が、5月24日（月）総長応接室において、平野総長、山下、中島、若尾、山本の各理事、杉浦医学系研究科長、井口医学部附属病院長らの出席のもと行われました。

イグナロ博士は、1980年代初頭から、亜硝酸化合物からNO（一酸化窒素）に至るまでの各種窒素化合物の血管への作用、特に、血管弛緩作用に注目して研究を進め、内皮から分泌される血管弛緩物質（内皮由来弛緩物質、EDRF）がNOであることを証明されました。これは、ヘモグロビンのspectral analysisを用いて、ヘモグロビンの最大吸光度は、EDRFに暴露すると変化するが、それはNOに暴露した時と全く同一であったという発見で、この研究により1994年にラッセルUCLA賞、1995年にチバ高血圧研究奨励賞、そして1998年にはノーベル医学・生理学賞を受賞されています。

また、同氏は、世界各国の研究室と共同研究を進め、高血圧症、動脈硬化症に対するNOの役割も明らかにされ、NO合成酵素の基質である酸素及びアルギニンの代謝も研究し、血管内分泌の概念を提唱、定着させました。国際NO学会理事長及び学会誌「NO」のEditor in Chiefとして、NO研究の統合、発展にも大きく寄与されています。本学でも、医学系研究科発育加齢医学講座老年科学と動脈硬化症の進展と退縮についての共同研究を進めており、継続した研究を行っています。

同氏は親日家でもあり、1978年以来頻りに来日され、日本薬学会、日本生化学会、日本NO学会等、数多くの学会にて招待講演が行われています。本学においても、1996年に長寿科学振興財団の招へいで来日し、大学院特別講義をされたのをはじめ、1999年にもノーベル賞受賞記念講演として大学院特別講義を行われました。さらに、2002年から3か年にわたり、日本学術振

興会著名外国人研究員招へい事業に採択され、各年に1、2度来日し、医学系研究科発育加齢医学講座老年科学と共同研究を行うとともに、大学院特別講義を担当されています。

授与式では、平野総長からイグナロ博士に名誉博士記と記念品が贈られ、総長からの祝辞、イグナロ博士の謝辞があり、その後和やかに懇談が行われました。

【略歴】

1941年	ニューヨーク生まれ
1962年	コロンビア大学で薬学修士取得
1966年	ミネソタ大学で薬理学博士号取得
1966年～1968年	NIH(米国国立衛生研究所)研究員
1968年～1972年	チバガイギー社(医薬品会社)主任研究員
1973年	米国チューレン医科大学薬理学講座助手
1976年	米国チューレン医科大学准教授
1979年	米国チューレン医科大学教授
1985年	カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部薬理学教授



平野総長から名誉博士記を授与されるイグナロ博士



生命を持たない生命体

武田 邦彦

火星に降り立った宇宙船から映像が送られてくる。それを固唾を飲んで見守る地上のステーション・・・でも目を皿のようにして見ても動く物は見あたらない。まさに火星は生命のかけらもない死の世界だったので。

臨終の床で医師が脈をとり、次第に静かになる患者を家族が看取る中でやがて「息を引き取りました」との宣告をうける・・・息をしている間は命があり、息を引き取ればそれでこの世ともお別れというのが昔からの決まりでした。



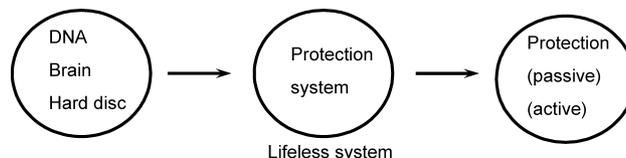
何も動かなければ死の世界か？

このように“動く”、“呼吸する”、“子どもを作る”などの行動は生命に特有のもので無生物にはありえないものです。私は12年ほど前、これからの環境を考えてどういう研究をしようかと悩み、その結果「自分で形を作ったり、修繕したりする人工材料を作りたい」と決意したのでした。

最初は、自分で修繕するのだから生命活動が必要と思いDNAの情報を人工材料に取り込む努力をしましたが、3年間すべて失敗に終わったのです。

この苦い経験からもう一度、生命活動を見てみると

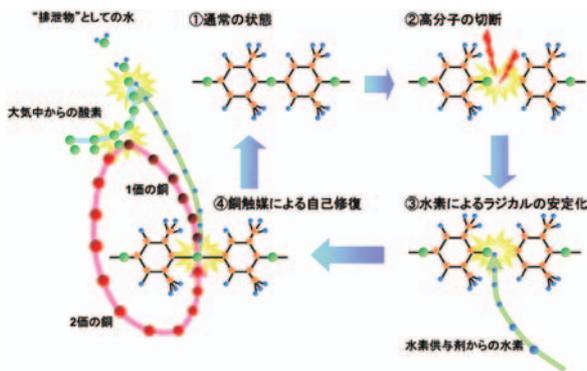
下の図に示したように生命活動の情報はいったん活動を司る“システム”へ転写され、その後はシステムが自動的に動いていることに気がついたのです。つまりDNAの情報に頼ることなく、自らの頭脳情報をシステムに転写すれば良いことが判ったのです。



まず自的に修復する材料がポリエーテルケトンで、次に呼吸する材料がポリフェニレンエーテルでできました。まだ不確定なところもありますが、酸素を吸収して銅錯体が酸素を運搬し反応します。酸素と水素の結合のエネルギーがドライビングフォースになり、水が排泄されるのです。この反応は別に目新しいものではなくすでに知られているものですが固体内で継続的に短時間で起こることがわかったのです。

そのうち、アメリカのアイオワ大学医学部の先生との共同研究が始まり、向こうはタンパク質ではあるが分子量38万のキネシンという“無生物”がまるで生きているように動く写真を撮っていました。生体内で物質運搬に使われているタンパク質とそれが動くのに使う螺旋状のレールの組み合わせを使った物で実に見事な動画です。

いま、研究は発展して、1)呼吸 2)運動 3)複製 4)修復 そして5)馴化 という生命体の活動を人工材料で行えることを証明し、さらにその組み合わせの材料へと発展して行こうとしています。



呼吸する人工材料

その研究の過程で、1) 材料が劣化する速度と修復する速度が同じ材料は永久材料か？ 2) 酸素を止めると「腐る」ことが人工材料で観察されるか？ 3) 悪くなったところだけを修復することができるか？ などこれまでの人工材料では注目されなかった興味津々の課題が見つかってきました。

このテーマは2002年10月にはCOE（重点的研究グループ）のサブグループに指定され、2003年10月には名古屋大学高等研究院のテーマに採択されました。

フランシス・ベーコンが近代科学の効用を説き、ガリレオとニュートンが科学と工学の基礎を作って以来、人間の活動は自然の営みとは離れた速度で進んできました。その原動力は地下資源でした。「自然の営みの速度」と「人間活動の速度」を比較して計算するのはなかなか難しいのですが、おおよそ現在の先進国の活動速度はエネルギーに換算して500倍程度と考えられます。このものすごい速度を維持するのに「地下資源」という非循環性の資源を使用している訳です。

その結果、先進国の文明はあと50年ほどで終わってしまいます。もしわし達が現在まで300年間、心血を注いできた近代工学があと50年で崩壊し、しかも「工学がなければ資源はまだ長く持ったのに」と言われる可能性も高いのです。

この研究の真の狙いは、生命37億年の長い年月の中で、生体システムこそが「物質循環の最適化」を示しており、わし達の文明との乖離が工学の行き先を不

透明にしている、だからそこを明らかにしたいということなのです。

この困難な課題を少しでも前進させるには「生命を持たない生命体」の研究だけでは難しいのではないかと考えています。そこで、伝統材料の調査と研究、工学的手法を用いた環境中の物質循環の研究を平行して進めています。伝統材料には長い時間の中で人間が蓄積した知恵が凝集し、特に古くから伝承されてきた民俗情報には一見荒唐無稽に思われるものでも深い経験の知恵を知ることができます。この研究は金属学会東海支部のご協力も得て伝統文化の研究会を行っています。

また「物質の劣化」という事柄の本質を実験的・熱力学的に解明し環境中の物質の循環とその劣化を明らかにする研究グループと共に解明を進めています。これらの総合的な研究を通じて少しでも資源の枯渇と環境の破壊による人類の危機を回避することに役立つことができると念願しています。

プロフィール

たけだ くにひこ



分子数が少ない微小領域とそこにおける原子の特異な振る舞いに関する研究（錯体、自己修復材料、難燃材料、IC基盤材料など）を長く手がけてきた。「有望なテーマは研究しない」というのが研究のモットーで共同研究者を困ら

せることが多い。多摩美術大学芸術学部非常勤講師や著書「エコロジー幻想」の一節が高等学校の国語の教科書に収録されるなど研究活動は工学と美術、文化の融合を探る方向に進んでいる。趣味は熱力学と歴史。1943年東京生まれ。東京大学教養学部基礎科学科から旭化成工業、芝浦工業大学工学部教授を経て、2002年より名古屋大学大学院工学研究科教授。2004年より高等研究院流動教員を兼任。



(財)武田科学振興財団研究奨励金の 贈呈式が行われる

財団法人武田科学振興財団の平成16年度研究奨励金が、6月9日(水)総長応接室において、内林政夫同財団理事長から平野総長へ贈呈されました。

この奨励金は、医学・薬学・理学・工学・農学のライフサイエンスに関する科学技術の進歩、発展に大きく貢献すると考えられる研究への助成を目的とするもので、贈呈に際し、平野総長から奨励金を有効に活用するとともに、大学として研究等の発展に一層努力していきたいことなど謝辞が述べられました。

続いて、採択された3名の研究者からそれぞれ研究概要の説明があり、なごやかに懇談が行われました。

研究奨励金採択者及び研究題目は、次のとおりです。

祖父江 元 大学院医学系研究科教授
研究題目「球脊髄性筋萎縮症の病態解明と治療法の開発」

小鹿 一 大学院生命農学研究科教授
研究題目「難培養性微生物、粘液細菌のゲノムを利用する新規抗生物質の開拓」

橋本 寿史 生物機能開発利用研究センター助手
研究題目「メダカをモデルとしたヒト遺伝病の研究・・・多発性嚢胞腎疾患原因遺伝子の同定」



贈呈式であいさつする内林理事長



太陽地球環境研究所等が主催する 「CAWSES キックオフ会議」が開催される - 宇宙空間の天気・気候を国際プロジェクトで解明 -

太陽地球環境研究所、名古屋大学21世紀COEプログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」、日本学術会議 SCOSTEP（国際太陽地球系物理学・科学委員会）専門委員会等が主催する「CAWSES（コーゼズ）キックオフ会議」が、6月16日（水）から18日（金）までの3日間、渥美半島のホテルを会場に開催されました。

CAWSESとは、Climate and Weather of the Sun-Earth System（太陽地球系の気候と天気）の略で、国際学術組織であるSCOSTEPが2004年から実施する5年計画の大型国際共同研究プロジェクトのことです。具体的には、「太陽活動の地球気候への影響」、「宇宙天気：サイエンスと応用」、「大気内相互作用過程」、「太陽地球系の長期変動」の4つのテーマから構成され、太陽と地球の間の広い宇宙空間で起こる現象の実態を解明することを研究目標にしています。そして、このプロジェクトの世界拠点の一つであり、かつ、日本国内の研究体制の総括的指揮を執っているのが太陽

地球環境研究所です。

今回の会議は、プロジェクトのスタートにあたるもので、SCOSTEP会長のM. Geller教授（ニューヨーク州立大学）と事務局長のJ. Allen氏（米国商務省海洋大気庁）、CAWSES組織委員会議長のS. Basu教授（ボストン大学）も駆けつけ、日本国内の研究活動について情報交換し、CAWSESによって期待される研究成果、国際貢献及び具体的な実施計画について議論しました。国内キックオフ会議を開催するのは日本が最初であり、会議では、日本のリーダーシップが国際的に期待されているという力強いメッセージが述べられました。

会議には、国内の大学、研究機関から招待された約100名の研究者が参加し、全体討論やテーマごとに今後の取り組みの発表がありました。初日は、国内滞在中の外国人研究者4名も参加したため、講演はすべて英語で行われました。また、36件のポスター発表でも、参加者による活発な意見交換が行われました。



会議の様子



ポスターセッションの様子



医学部画像情報外科学（ジョンソン・エンド・ジョンソン）寄附講座の創設記念式典等を開催

医学部は、今年4月に設置した医学部画像情報外科学（ジョンソン・エンド・ジョンソン）寄附講座の創設を記念し、6月11日（金）医学部鶴友会館において、学内外の関係者や教職員など多数出席のもと、創設記念式典、講演会及び祝賀会を開催しました。

この寄附講座は、消化器外科、泌尿器科、胸部外科、小児外科、婦人科等の多くの診療科において行われている鏡視下手術の学生や研修医に対するトレーニングと評価システムの確立、新しい画像支援技術の基礎研究、他機関等とのテレ・コラボレーションのシステムの立ち上げ等を行います。

記念式典では、杉浦医学部長の式辞、平野総長のあいさつに続いて、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社代表取締役社長の松本 晃氏から祝辞が述べられました。次いで、中尾昭公医学系研究科教授から寄附講座開設の経緯について説明があり、藤原道隆医学部同講座助教授から新講座の今後の活動について抱負が述べられました。最後に、平野総長から、本学の教育研究の進展及び充実に寄与されたことに対する感謝



松本社長に感謝状を贈呈する平野総長

の意を表し、松本社長に感謝状及び記念品を贈呈しました。

続いて行われた記念講演会では、北島政樹慶應義塾大学医学部長による「高度先進技術を駆使した癌治療の低侵襲化と個別化」と題する講演が行われ、参加者は熱心に聞いていました。

記念祝賀会では、井口医学部附属病院長のあいさつに続き、中尾医学系研究科教授の発声で乾杯が行われ、参加者全員で同講座の創設を祝いました。最後に、杉浦医学部長から謝辞が述べられ、祝賀会も盛況のうちに終了しました。



あいさつする平野総長



教育学部附属中・高等学校が 第2回生徒会フォーラムを開催

教育学部附属中・高等学校は、6月5日(土)、教育学部中等教育センターと共催で、第2回生徒会フォーラムを開催しました。

このフォーラムは、生徒会同士の交流をはかり、有意義な意見や情報交換を行うことを目的に開催されたもので、当日は、名古屋市内を中心に、県内から多数の生徒会執行部のメンバーが集まり、活発な意見交換が行われました。また、生徒会活動に興味を持つ中学3年生も参加し、議論に積極的に参加する姿も見られました。

午前に行われた第1部では、愛知高等学校、昭和高等学校、名古屋西高等学校、名城大学附属高等学校、名東高等学校及び本学教育学部附属中・高等学校、計6校の生徒会執行部から各校の特色ある生徒会活動が報告されました。これに対し、参加者から多くの質問が出され、高校生らしい活気ある議論が繰り広げられました。

午後の第2部は、4つの分科会に分かれ、活発な議論が行われました。各分科会の内容は以下の通りです。

第1分科会(学校祭企画)では、予算問題や近隣の人々との関係、一般公開など、学校祭を企画する段階での諸問題が話し合われ、中心となる執行部の役割とその重要性を再認識すると同時に、生徒会メンバーの意気込みが感じられました。

第2分科会(学校祭運営)では、実際に行われている企画や、その運営方法に議論の中心が置かれました。前夜祭・後夜祭の内容についての意見交換や模擬店の規制・収益・店舗数など話し合いは細部におよび、学校祭運営に対する参加者の関心の高さを伺わせました。

第3分科会(制服)では、各校の制服規定と現状、今後の展望について意見交換が行われた後、高校生が考える制服の意義について話し合われました。

第4分科会(諸活動)では、各校独自の取り組みとして、意見箱・機関誌・学校設定記念日などが話題となり、今後の各高校における生徒会活動の大きな参考となったようです。

当日は、名大祭も開催されており、フォーラムに参加した高校生も昼の休憩時やフォーラム終了後には思い思いに名大祭を楽しんでいました。このフォーラムを機に、地域の中高生の交流の輪が広がっていくことが期待されています。



生徒会フォーラムの様子

● 総長の学内視察 ●

1 附属農場と太陽地球環境研究所

本学は、本部や大部分の学部、研究科等が置かれている東山キャンパス以外にも、鶴舞キャンパスや大幸キャンパスをはじめとして、全国各地に研究所、施設等があります。

平野総長は、東山地区以外に勤務している教職員とも、一体感を持って、本学を発展させていきたいとの希望を持っており、これを実現するための第一歩として、多忙な業務の合間を縫って、こうした地区を順次視察していくことになりました。

最初の学内視察として、総長は、台風一過の5月21日(金)、東郷町にある大学院生命農学研究科附属農場と豊川市にある太陽地球環境研究所を訪れました。

初めに、附属農場を訪れた総長は、喜多生命農学研究科助教授から施設の老朽化等の附属農場の現状、研究活動、今後の展望等の説明を受けた後、長靴に履き替え、農場内を歩いて視察しました。

当日は、農学部3年生の実習日だったため、グループごとに実習している学生たちが、行き交うごとに、総長に元気な声であいさつする姿が見られました。ま



農業実習中の学生と懇談する平野総長



上出研究所長の説明を受けながら研究所内を視察する平野総長

た、総長は、実習場所に立ち寄り、作物の手入れや鍬の使い方を実習していた学生としばらくの間懇談しました。

その後、太陽地球環境研究所に移動し、上出研究所長から、附属観測所を含めた同研究所の活動状況、研究成果、今後の展望等について説明を受けました。

続いて、木々が生い茂り市街地の中心にあるとは思えない研究所内において、UHF電波望遠鏡のアンテナの説明を受けるとともに、旧豊川海軍工廠の遺物である火薬庫を視察しました。

● 総長の学内視察 ●

2 鶴舞キャンパス

平野総長は、二回目の学内視察として、6月8日(火)、鶴舞キャンパスを訪れました。

当日は、杉浦医学系研究科長及び井口医学部附属病院長の出迎えを受けた後、総長から施設を見せてほしいとの要望があり、基礎医学研究棟、中央診療棟、外来診療棟及び病棟（ナースステーション、病室）を足早に見学しました。

その後、総長は、東病棟8階会議室において、大学院医学系研究科、医学部附属病院及び事務部の役職者等と懇談を行いました。

懇談では、総長から、東山キャンパス以外の建物等も実際に見せてもらい、現場の生の声を聞きたいとの自らの希望から、このような懇談の場を設けてもらったこと、また、鶴舞キャンパスで働く方々とも一体となって大学を盛りたてていきたいとあいさつがありました。

出席者から、「法人化になったことにより、病院の財政が大学の財政を圧迫しないよう頑張りたい」、「質の良い医療、看護を目指したい」、「勤務体制の見直しが必要となっている」、「頑張ったことに対するインセンティブ等を考えていただきたい」、「大学の中で附属病院がよく理解されていないとともに、学外にも理解されていないのでアピールが必要である。鶴舞キャンパスにも当てはまるが、東山キャンパスも大学の雰囲気を作ることが大切である。また、学内の共同研究が横断的に対応できると良い」、「大学の利益、附属病院の利益とは何かを考え、病院のパフォーマンスとして、大学の中の位置付けを考えるとともに、外部評価も踏まえた運営が必要である。さらに、働く意欲をもてる病院にしたい」等の意見が出され、総長が、個々の事項について丁寧に対応しました。



鶴舞キャンパス



総長等表敬訪問一覧

海外等から総長等を表敬訪問された方々は、次のとおりです。(平成16年4月～6月)

月日	学校等	国	代表者	来学の目的
4 . 19	ワルシャワ工科大学	ポーランド	Stanislaw MANKOWSKY 学長 他 1 名	学術交流推進に関する意見交換のため(大学院工学研究科)
4 . 28	哈爾濱工業大学	中国	呂 曉偉 外事処長	学術交流推進に関する意見交換のため(大学院工学研究科)
5 . 31	マケレレ大学	ウガンダ	James MULIRA 人文学部歴史 学科長	本学の歴史と特色、近代化への貢献、科学 への貢献についての調査及び意見交換のた め(大学院環境学研究科)
6 . 3	米国大学経営ミッ ション	アメリカ	Frank H.T.RHODES 博士(ザ・ ワシントン・アドバイザーグ ループ プリンシパル、コーネル 大学名誉教授)他 5 名	大学経営に関するセミナーの実施
6 . 4	エチオピア大使館	エチオピア	Teshome FISEHA 参事官	留学生交流の促進について懇談を行うため (国際課)
6 . 9	駐名古屋大韓民国総 領事館	韓国	柳 洲烈 総領事	日韓交流(留学生交流を含む)の促進につ いて懇談を行うため(国際課)



ワルシャワ工科大学長らと和やかに懇談する
平野総長(4月19日)



大学経営に関するセミナーの様子(6月3日)



博物館が第32回・第33回特別講演会を開催

博物館は、第7回特別展「名古屋大学の研究・教育を支えた匠の技」に関連して、5月20日(木)第32回特別講演会「地質年代学の最前線を支える石工技術」(鈴木年代測定総合研究センター長)を、また、6月6日(土)名大祭の企画の一つとして、第33回特別講演会「生きている金属」(井村 徹名誉教授)を開催しました。

第32回特別講演会で、鈴木センター長は、長崎県鷹島の海底遺跡から出土した元寇船の木石碇を例に、人類の歴史や地球の歴史を探る上で、時間を計ることの重要性について触れ、年代測定の手法として、同センターにある放射性炭素(14C)を用いた方法や足立博物館長と共同で開発したCHIME(チャイム)年代測定法などを紹介しました。そして、正確な測定年代を得るためには、一流の技能をもった技術者による測定資料の加工技術が不可欠であること、さらに、このような一流の技術に支えられて初めて、世界的にも信頼性の高い年代研究が可能になることなどをわかりやすく解説しました。

講演会には、学内外から約60名の参加があり、年代測定の難しさや、採取された岩石資料の加工技術についての質問が多く寄せられ、活発な意見交換が行われ

ました。また、講演会終了後も、国内外の年代測定技術について、熱心に質問する参加者の姿が見られました。

また、第33回特別講演会では、特別展の「ミクロの世界に挑戦」コーナーに展示してある「超高圧電子顕微鏡その場実験装置」を開発した井村名誉教授が、市民、学生、大学関係者など約50名を前に講演しました。

井村氏のグループは、40年程前に、世界で初めて、電子顕微鏡にテレビカメラとビデオテープを組み合わせ、金属の「転位」を動的に観察することに成功し、数々の成果を挙げました。井村氏は、講演で、この成功は、電子顕微鏡に入れる超小型引張り試験機の開発を本学独自で進めたことにあると強調されました。また、一連の研究成果は、学術映画「生きている金属」(企画：日本学術振興会、製作：カジマビジョン)として、専門家以外にもわかりやすくまとめられ、海外でも高い評価を得て、数か国語のバージョンが製作されています。講演の後半では、井村氏が当時を振り返りながら、この映画を上映しました。講演終了後の質疑応答では、なぜ転位線が電子顕微鏡では黒い線として観察できるのかといった質問をはじめ、多くの質問が寄せられました。



講演する鈴木年代測定総合研究センター長



講演する井村名誉教授



博物館が第11回コンサートを開催 - オカリナと尺八のアンサンブル -

博物館は、5月27日(木)博物館展示室において、第11回名古屋大学博物館コンサート(NUMCo)「オカリナと尺八のアンサンブル」を開催しました。今回は、中部オカリナ協会理事長の加藤いつみ名古屋市立大学教授をはじめ、総勢12名の演奏者を迎えて行われました。

コンサートは、「茶つみ」のオカリナ合奏で始まり、次に、「コンドルは飛んでいく」を独奏しながら加藤氏が客席の間を通過して登場し、今回のコンサートのねらいと特徴を解説しました。また、懐かしい文部省唱歌やオリジナル曲など14曲が、150名を超える満員の聴衆の前で演奏されました。

続いて、飯田勝利氏による尺八の独奏の後、尺八とオカリナの合奏で「上を向いて歩こう」や「家路」などが演奏されました。演奏の間には、オカリナという楽器の発祥から現代までの歴史やオカリナが生涯音楽学習に大変適していることについて、わかりやすい解説が行われました。

聴衆は、バイオリンやピアノに比べて馴染みの薄いオカリナと尺八の音色やこれらの奏でるハーモニーを楽しんでいました。アンケートには、「オカリナの立体的な合奏が良かった」、「尺八の音色があんなに心にジーンとくると思わなかった」などの感想が寄せられました。



コンサートの様子



名古屋大学博物館友の会が発足 - 大学博物館で初めての友の会 -

名古屋大学博物館友の会が、6月5日(土)、正式に発足しました。

本学博物館友の会は、博物館の活動を支援し、博物館を楽しく、積極的に活用することを目的として設立されたもので、大学博物館では初めての友の会となります。友の会設立の気運は、博物館が平成12年4月に創設された当初からあり、同会の設立を目標に、昨年4月に友の会設立準備会を発足させ、会員を募ってきたところ、昨年度末には会員数が90余名になりました。また、設立準備会では、この間、春の準備会設立コンサート、夏の懇親会及び秋の大学資料展示室の見学会の企画、ニュースレターの発行(4回)を行ってきました。

発足式では、会員に正式な友の会設立の提案があった後、規約を制定し、小林身哉金城学院大学教授を代表に選出しました。また、今後の活動として、会員が自由に利用できる「友の会文庫」の設立や博物館でのボランティア活動などについても話し合われました。

また、総会に先立ち、名古屋市科学館の尾坂知江子学芸員による「アメリカのライフサイエンス博物館視察報告」と題する講演が行われ、アメリカの三つの博物館の展示の特徴や生物倫理の取り扱いなどについて、興味深い話が披露されました。



講演する尾坂氏



農学国際教育協力研究センターが 2004年度第2回オープンセミナーを開催

農学国際教育協力研究センターは、6月17日(木) (株)KANSOの沖森泰行主任研究員(生物環境研究所所属)を講師として招き、「地球温暖化対策への提案-熱帯での植林と炭化利用-」をテーマに、2004年度第2回オープンセミナーを開催しました。

沖森氏は、まず、(株)KANSOが関西電力(株)グループとして、熱帯林地域での修復植林活動にかなり以前から取り組んできた実績を持つことを紹介した後、2001年からインドネシア共和国南スマトラ州で行っている現地実証試験では、林地やパルプ工場の大量残廃材を炭化し、その炭を土壌改良材や浄水材など非燃料の形で利用することで炭素固定化と地域産業育成を目標にした研究を現地企業と共同して行い、それを京都メカニズムのクリーン開発メカニズム(CDM)事業化に展開する可能性についても検討していると報告しました。

セミナーには、学内の教員、学生のほか、東京や沖縄から当日所用で本学へ立ち寄り、テーマに惹かれて参加した国際協力分野の専門家など、20名が参加し、炭の土壌改良効果の有効性や経済的な採算性の点でどのような見通しがあるのか等、様々な視点に立って、活発な質疑応答が行われました。セミナーの参加者の多くが、今回のテーマの重要性と困難性、そして極めて今日的な課題に具体的に挑戦する取り組みの面白さについて、理解を深めたものと期待されます。



セミナーの様子



構内環境美化運動 「キャンパスクリーンウィーク」を実施

構内環境美化運動「キャンパスクリーンウィーク」が、名大祭終了後の6月7日(月)から11日(金)の5日間、全学の教職員及び学生の協力を得て実施されました。

これは、名大祭終了後の構内の環境美化のために、平成4年から毎年実施されているもので、その後、全国の大学でも行われるようになりました。なお、現在は、キャンパスクリーンウィークのほかに、名大祭実行委員会を中心とした学生が、名大祭期間中にはゴミの分別回収、終了直後には清掃等を行い、構内美化に努めています。

本部では、6月9日(水)、山口施設管理部長のあいさつの後、約90名の本部職員が、一斉に東山キャンパス構内及び周辺の市道に分かれ、清掃、雑草の刈り取り、測道に詰まった泥土の除去及び不要な立て看板、ビラ等の撤去、整理等の作業を行い、爽やかな汗を流しました。また、当日は、名大祭実行委員、体育会、文化サークル連盟等の多くの学生が、熱心に清掃する姿も見られました。



構内の清掃作業に汗を流す本部職員



本学で東海地区国立大学法人等新入職員研修を開催 - 法人化後初の新入職員研修 -

平成16年度東海地区国立大学法人等新入職員研修が、6月22日(火)から24日(木)までの3日間、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この研修は、東海4県の大学、高等専門学校、大学共同利用機関等に新たに採用された一般職員に対し、平成4年度から実施されてきましたが、今年度は、各機関が法人化されたことにより、法人職員としての心構えを自覚させるとともに、法人化後必要な業務遂行上の基礎知識、能力、態度等を養成することを目的として実施されたものです。

今年度は、本学の22名(男性13名、女性9名)を含め、15機関から93名(男性67名、女性26名)が参加し、森理事(人事・労務関係担当)のあいさつの後、千葉総務企画部長による「国立大学から国立大学法人へ」、瀧本財務部長による「国立大学法人の財務会計制度+」、金井篤子教育発達科学研究科教授による「職場の人間関係」、筏津人事労務課長による「法人職員として」、渡邊社会連携課長による「大学における社会連携と産学連携」、平野学務企画課長による「学務関



講義する千葉総務企画部長

係業務と職員のあり方」、小川豊昭総合保健体育科学センター教授による「メンタルヘルス」、藤田敬一元岐阜大学教授による「仕事に人権感覚をいかす」、(株)マネジメントサービスセンター講師による接客態度、名刺交換、電話対応などの「ビジネスマナーの心構えと基礎知識」等広範かつ内容のある講義が行われ、研修生は、熱心に聴講していました。また、初日の研修終了後には、懇親会が行われ、他機関職員との親交を深めるなど、有意義な研修となりました。



熱心に聴講する研修生

 INFORMATION 

イベント等の開催予定一覧

イベント	日時	概要	連絡先
テクノフロンティアセミナー - 触れてみよう、電子と情報の最先端に -	8月2日(月)~8月4日(水)	場 所：工学部 対 象：愛知県内の高校生 内 容：高校生に、電子・情報分野における大学レベルの先端工学のいくつかを実験によって体験してもらい、それを通して工学の面白さと重要性を啓蒙する。	工学部・工学研究科 教務課 052 - 789 - 3599
エコトピア科学研究機構エネルギーシステム(中部電力)寄附研究部門シンポジウム	8月3日(火)13時30分~16時30分	場 所：ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー 講演者：Mr.Jhon J.Easton, Jr. Mr.Paul Bulteel 内 容：欧米諸国が大停電から得た教訓の紹介や防止策 同時通訳：なし	後藤益雄エコトピア科学研究機構客員教授 052 - 789 - 2098
生物機能開発利用研究センター公開実験講座2004	8月7日(土)~8月8日(日)10時~16時	テーマ：バイオサイエンス・バイオテクノロジーを体験する 場 所：生物機能開発利用研究センター、大学院生命農学研究科 対 象：社会人、学生(高校生以上) 申込締切：7月9日(金) http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/%7enubs/shakai.html	生物機能開発利用研究センター・公開実験講座2004係 052 - 789 - 5194
野依記念物質科学研究館・物質科学国際研究センター開所記念式典及びシンポジウム	8月9日(月)13時~	場 所：野依記念物質科学研究館、豊田講堂 内 容：野依記念物質科学研究館での物質科学国際研究センターの実験研究開始と野依良治博士のノーベル化学賞受賞を記念した展示室の一般公開を記念して開催。 13時~ テープカット 13時30分~ 記念式典 14時~ 記念シンポジウム ・講演 野依良治特任教授 ・パネルディスカッション 17時~ 高校生との懇談会	理学部・理学研究科・多元数理科学研究科 庶務掛 052 - 789 - 2394
テクノサイエンスセミナー - 体感する物理工学の世界 -	8月11日(水)9時~17時	場 所：工学部新1号館、3、5、6、9号館 対 象：東海地区の高校生(60名程度) 内 容：大学教員・大学院学生が、講義と体験学習(実験・計算機シミュレーション)を通して、高校生と直接触れあい、高校生に大学で理工学を学ぶ面白さを体感してもらう。	工学部・工学研究科 教務課 052 - 789 - 3599

イベント	日 時	概 要	連絡先
大学説明会（東山キャンパス）	8月11日(水) 8月12日(木) 8月13日(金) 各日とも10時～16時	文科系学部 工学部以外の理系系学部 工学部 場 所：豊田講堂及び各学部等	学務部入試課 052 - 789 - 5765
名古屋大学学外説明会「大学紹介と講演の午後」	8月18日(水) 8月29日(日) 各日とも13時～16時30分	場 所：メルパルク横浜 場 所：新大阪シティープラザ	学務部入試課 052 - 789 - 5765
第15回日本数学コンクール 第8回日本ジュニア数学コンクール	8月22日(日)10時30分～16時	場 所：IB 電子情報館	研究協力・国際部社会連携課 052 - 789 - 6144
平成16年度名古屋大学東山地区公開講座（全15回）	8月24日(火)～10月14日(木)原則火・木曜日 18時～19時30分	テーマ：「見る」- 認知・認識への挑戦 場 所：シンポジオンホール	研究協力・国際部社会連携課 052 - 789 - 6144
第7回高等研究院セミナー	9月28日(火)17時～	場 所：高等総合研究館カンファレンスホール 講演者：新美智秀工学研究科教授（高等研究院流動教員「高クヌッセン数流れのミクロスケール・アナリシス（仮題）」） 講演者：松本邦弘理学研究科教授（高等研究院流動教員「生命現象を制御する分子 シグナルネットワーク（仮題）」）	研究支援課高等研究院掛 052 - 788 - 6051
第4回博物館企画展	10月13日(水)～11月12日(金)10時～16時	テーマ：日本脳外科の創始者 斎藤 眞（仮題） 場 所：博物館 休館日：月・火曜日 ただし祝休日は開館	博物館事務室 052 - 789 - 5767
第11回 MPS シンポジウム・複雑系科学シンポジウム	10月26日(火)～10月27日(水)	テーマ：複雑系の科学とその応用 場 所：シンポジオンホール、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー http://w3.ipl.human.nagoya-u.ac.jp/mps2004/	北栄輔情報科学研究科助教授 052 - 789 - 3521

INFORMATION

本学関係の新聞記事掲載一覧（16年6月分）

	記 事	月 日	新聞等名
1	モンゴルの医療水準向上に愛知県内医・歯学系5大学（本学含む）で医療教育支援	6.1(火)	毎日(朝刊) 他2社
2	生物時計の「振り子」たんぱく質を解明 理化学研究所と本学石浦正寛・遺伝子実験施設教授らのグループ	6.1(火)	サンケイ
3	超小型放射光シンポジウム「産学連携のキーツール、放射光」4日開催	6.1(火)	中日(朝刊)
4	3日から名大祭 プロの大道芸人登場、6日学術文化講演会「若者言葉から見るケータイ文化」	6.1(火)	中日(朝刊)
5	きらり：名大祭 本部実行委員会広報局長・青木伸之さん（本学法学部3年）成功にむけて準備に余念なし	6.1(火)	中日(朝刊)
6	世界初 シリコン酸化膜の原子配列観察成功 田中信夫・エコトピア科学研究機構教授らのグループ	6.2(水)	中日(朝刊)
7	本学大学院生・長谷徹志さん、冒険家大場満郎氏と2300キログリーンランド縦断	6.2(水)	中日(朝刊)
8	叙位叙勲：紀本和男・本学名誉教授 正四位	6.2(水)	読売
9	地震の話：福和伸夫・環境学研究科教授「効果的な教育には、道具や教材重要」	6.3(木)	朝日(朝刊)
10	産学官連携功労者表彰 日本学会議会議長賞に上田実・医学系研究科教授ら	6.4(金)	日刊工業
11	ニッポン見聞録：大学院生・韓秀蘭さん 運転免許で一念発起	6.4(金)	朝日(夕刊)
12	名大祭はバリアフリー	6.6(日)	中日(朝刊)
13	頼りになる「民間大使」大学院生ブルム・ピラクさん	6.6(日)	読売
14	座談会 ITSで理想のひと・クルマ社会 森川高行・環境学研究科教授ら	6.7(月)	毎日(朝刊)
15	第8回超伝導科学技術賞受賞 藤巻朗・工学研究科教授ら	6.7(月)	日刊工業
16	名大サロンの主役：藤原一宏・多元数理科学研究科教授 数式の「深さ」伝える	6.8(火)	中日(朝刊)
17	'04理系白書 提言：池内了・理学研究科教授 基礎科学は誰が守る	6.8(火)	毎日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
18	「雨水利用と緑化を進める会」設立10周年記念フォーラム 13日開催 森島昭夫・本学名誉教授講演	6.8(火)	毎日(朝刊)
19	NPO法人「先端医療を推進する会」(代表理事：岩田久・本学名誉教授)設立記念講演会を野依記念学術交流館で19日開催	6.8(火) 6.20(日)	中日(朝刊) 毎日(朝刊) 日経(朝刊)
20	てくてくてクノ：インターネットITSで安全で便利に 02年10月には「インターネットITS協議会」に本学など8大学参加	6.8(火)	毎日(朝刊)
21	21世紀COEプログラム公開講演会「宇宙と物質の起源...宇宙史の物理学的解説」 浜松ホトニクス の書馬輝夫社長が「光の可能性」講演	6.9(水) 6.10(木)	読売 中日(朝刊)
22	江崎玲於奈賞の審査員に野依良治・特任教授などノーベル賞受賞者4人	6.9(水)	日刊工業
23	老年学：井口昭久・医学系研究科教授 言語の壁、思いの壁	6.10(木)	朝日(朝刊)
24	家森信善・経済学研究科教授「地域金融システムの危機と中小企業金融」出版	6.10(木)	読売
25	東海地方の5月の地震 災害対策室・林能成助手	6.12(土)	読売
26	地下街で大地震に遭遇したら 災害対策室・木村玲欧助手「怖いのはパニック」	6.12(土)	読売
27	大学生の数学力ダウン 教研連・数学教育小委員会(委員長：浪川幸彦・多元数理科学研究科教授)実施アンケート	6.12(土)	中日(朝刊)
28	日本数学協会の「数学文化公開講演会」13日に多元数理科学研究科で開催	6.12(土)	中日(朝刊)
29	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 核汚染の後始末	6.12(土)	日経(夕刊)
30	名古屋地理学会研究報告会 情報科学研究科で19日開催	6.13(日)	中日(朝刊)
31	「あいち学生支援コンソーシアム」設立総会 初代会長に平野眞一総長選出	6.13(日) 6.20(日)	読売 朝日(朝刊)
32	「産学連携のキーツール、放射光」シンポジウム開催 平野眞一総長「小型放射光源は、ものづくりの世界的拠点の愛知になくてはならない」	6.15(火)	中日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
33	ときめき時日記：外国人留学生編 本学大学院生・エルムロドフ・エルドルジョンさん	6.15(火) 6.22(火) 6.29(火)	中日(朝刊)
34	アラスカの植物、愛知万博で展示 伊藤繁・理学研究科教授がプロジェクトリーダー	6.16(水)	朝日(朝刊) 読売
35	目利きが選ぶ今週の3冊：「誇り高い技術者になろう」黒田光太郎・工学研究科教授ほか編	6.17(木)	日経(夕刊)
36	紙上診察室：妊娠は内分科医に相談を 大磯ユタカ・医学系研究科教授	6.18(金)	中日(朝刊)
37	中高一貫「海陽学園」2006年春開校へ着々 浪川幸彦・多元数理科学研究科教授は「社会人としての役割を身につけさせてほしい」	6.18(金)	読売
38	「中部が拓く日本の未来 教育と地域活性化」シンポジウム開催 パネル討論に山本進一理事参加	6.19(土)	日経(朝刊)
39	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 不調のときの神頼み	6.19(土)	日経(夕刊)
40	ひったくり被害 博士論文返して本学大学院留学生・高箭さん	6.19(土)	中日(夕刊)
41	「理学部学生自治会・イラク派兵と占領に反対する会」学内で多国籍軍参加反対の抗議行進	6.19(土)	中日(朝刊)
42	自衛隊の多国籍軍参加に「憲法の理念消えた」森英樹理事	6.19(土)	朝日(朝刊)
43	発がん性ベンゼンを分解する人工酵素の開発に成功 渡辺芳人・理学研究科教授	6.20(日)	読売
44	「連続憲法講座2004 い・ま・こ・そ・憲法」始まる 初日は「憲法ってなあに？」森英樹理事	6.20(日)	中日(朝刊)
45	第3回産学官連携推進会議 上田実・医学系研究科教授「社会変化を巨視的に見つめることが重要」と主張	6.21(月)	日刊工業 日経(朝刊)
46	21世紀COEプログラム「宇宙と物質の起源...宇宙史の物理学的解読」の拠点アドバイザー立花隆さんと研究者の意見交換会開催	6.22(火)	中日(朝刊)
47	内藤科学技術振興財団の2004年度の研究助成7件決定 山本芳彦・工学研究科助教授ら	6.22(火)	中日(朝刊)
48	数理ウェブ開催 鈴木紀明・多元数理科学研究科助教授、安本雅洋・情報科学研究科教授講演	6.22(火)	中日(朝刊)
49	国際シンポジウム「IPカルチャーの確立と普及を目指して」野依良治・本学特任教授ら	6.22(火)	朝日(朝刊)
50	建築：野依記念物質科学研究館・学術交流館 突き出し印象的な正面	6.22(火)	毎日(夕刊)

	記 事	月 日	新聞等名
51	胃がんを治すために早期発見・早期治療を 後藤秀実・医学系研究科教授	6.23(水)	朝日(朝刊)
52	審判'04参院選あいち・ここを問いたい：小野耕二・法学研究科教授	6.23(水)	朝日(朝刊)
53	城山中学生徒と本学留学生7人が交流 国際開発研究科実施の国際理解の「出前」授業	6.23(水)	中日(朝刊)
54	田中宣秀・教育発達科学研究科教授 インターンシップの現状と今後の課題	6.23(水)	朝日(夕刊)
55	多国籍軍参加について 小野耕二・法学研究科教授	6.24(木)	朝日(朝刊)
56	名古屋刑務所事件公判で弁護側証人として二村雄次・医学系研究科教授出廷	6.24(木)	中日(朝刊)
57	技術立国日本の逆襲：青色発光ダイオード 名城大学教授・赤崎勇・本学名誉教授	6.25(金)	サンケイ
58	アップデート：茂登山清文・情報科学研究科助教授身体としてのアート	6.25(金)	朝日(夕刊)
59	あすへの話題：池内了・理学研究科教授 ダークエネルギー	6.26(土)	日経(夕刊)
60	愛・地球博の記念国際フォーラムを来夏開催 平野真一総長「フォーラムは万博終了後も継続して開いていきたい」	6.28(月)	中日(朝刊)
61	時のおもり：池内了・理学研究科教授 「間接水」大量消費が問題	6.28(月)	中日(朝刊)
62	消防士調査「惨事ストレス」6割体験 陸山英順・教育発達科学研究科教授「報告しあう仕組み、とても有効」	6.29(火)	読売
63	人形劇学生企画「たなばた 公演」本学から7グループが上演	6.29(火)	中日(朝刊)
64	大谷肇・工学研究科助教授と愛知県産業技術研究所 UV硬化樹脂の科学分析法開発	6.30(水)	中日(朝刊) 日刊工業
65	生物機能開発利用研究センター公開実験講座受講者募集	6.30(水)	中日(朝刊)
66	工学部主催、高校生を対象にしたテクノフロンティアセミナー参加者募集	6.30(水)	読売
67	野依記念物質科学研究館開所記念シンポジウム「科学その美しきもの」8月9日開催	6.30(水)	中日(朝刊)
68	国際開発研究科で7月2日に国際協力関係の就職ガイダンス開催	6.30(水)	読売
69	利益相反などに対するルール策定の現状についてのアンケート調査 本学では一般的ルール策定あり	6.30(水)	毎日(朝刊)

本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

総務企画部 総務広報課 広報掛

電話：052（789）2016

FAX：052（789）2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

②7 八高生青春像 わが友 若き旅人よ

学生帽に学生服、厚いマントを羽織り、高下駄を履いた青年のブロンズ立像（写真 ） この「八高生青春像」は、旧制第八高等学校（八高）の同窓会である八高会が母校創立80年を記念して1988年に名古屋市立大学構内に建立したものです。

本連載の第3回（ 110 ）でも取り上げたように、八高は1949年に本学が新制大学として（再）発足した際に本学に包括された旧制高等学校です。八高の校地・校舎は、創立翌年に愛知郡呼続町大字瑞穂字山ノ畑（現在の名古屋市瑞穂区瑞穂町山の畑）に設けられました。同所は、新制名古屋大学の発足に際して本学の瑞穂分校（教養部）となった後、名古屋市に譲渡されて現在のように名古屋市立大学（名市大）山の畑キャンパスとして利用されています。

八高生青春像の設置場所については、吹上公園内や市立博物館前などが検討されましたが、最終的には名市大山の畑キャンパス内の「剣ヶ森」（八高の校庭跡）に設置することとされました。ブロンズ像の座台には、八高寮歌「光のどけき」の一節から採った題字「わが友 若き旅人よ」が刻まれています。その除幕式は、1988年10月8日に名市大関係者を来賓として八高同窓生約100名が集まって行われました（写真 ）。また、八高生青春像は1/5サイズのミニチュア像（写真 ）も製作され、希望者に頒布されました。

なお、八高生青春像については、「名古屋大学大学史資料室ニュース」第15号（2003年10月刊）で詳細に触れていますので、ご参照ください。

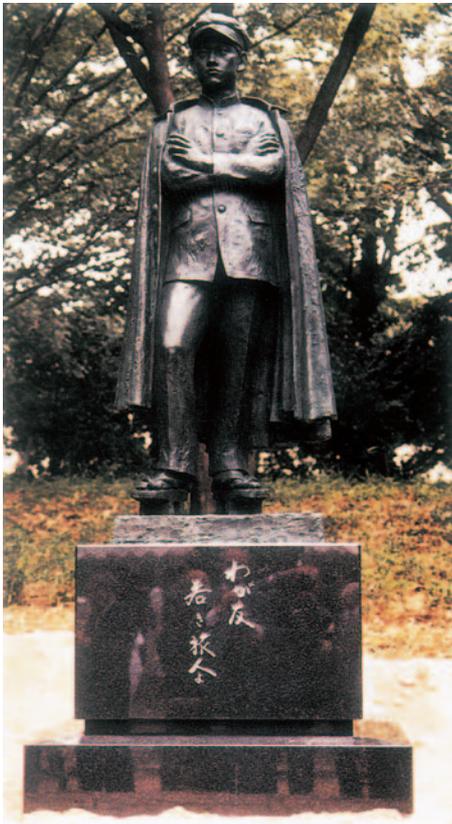


写真 ： 除幕式直後の八高生青春像



写真 ： 像の前に寮歌を合唱する除幕式参加者



写真 ： 八高生青春像1/5サイズミニチュア



名古屋市立大学のキャンパス

名古屋大学の歴史に関する記念碑・記念物等に関する情報をお持ちでしたら、
大学文書資料室（052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp）へご連絡下さい。